

言葉の力を高め、主体的に学ぶ児童の育成

～ICT活用による国語科の授業改善を通して～

学校名 新潟県 燕市立粟生津小学校

所在地 〒959-0227
新潟県燕市粟生津6 5 7 番地

ホームページ
アドレス <http://www.tsubame-city.ed.jp/aouzu-e/>

1. 研究の背景

平成23年度、24年度に、国語科における言葉の力を高め、主体的に学ぶ児童の育成を目指して研究を行ってきた。1年次は説明的文章の教材に焦点を当て、基本となる型を学び、それを使って表現する活動を繰り返し行い、児童に思考と表現の型を身に付けさせた。2年次は教材を文学的文章にも広げ、研究を進めた。この結果、次のような成果を得ることができた。

- ① 単元を貫く目標（ゴール）を明確に提示することで、「何のためにこの教材を学ぶのか」ということが明確になり、児童の目的意識が高まり、意欲的に学ぶことができる。
- ② 教材文中の言葉や筆者の表現・伝え方に着目して教材を読むようになり、表現する力だけではなく、教材を読み取る力も高めることができる。

2. 研究の目的

研究の背景を受け、目的意識をもって教材文を読み取る活動（インプット）を通して「読む力」を、学んだ型を用いて表現する活動（アウトプット）を通して「書く力」を伸ばし、「言葉の力」を今まで以上に高めていく。そのため、ICTの活用方法や支援のあり方を明らかにする。

デジタル教科書の活用とテキストに書かれていることを実感として理解させるため、映像や音声も取り入れた効果的な提示を工夫する。また、教科書教材の表現の良さに気付かせ、児童がそれを生かす指導法を工夫する。これと同時に、フラッシュ教材等も活用し、聴覚と視覚に働きかけ、繰り返しよい表現に触れたり、理解を深めたりすることで「言葉の力」を高めていけるようにする。

3. 研究の方法

(1) 国語科における授業改善

- ① 単元を通してつきたい言葉の力を明確にする。
- ② 単元を貫く目標（ゴール）を明確に提示して学習を進める。
- ③ 児童が主体的に学ぶための単元計画（指導計画）の工夫を図る。
- ④ 教材で学んだことを生かした表現活動を設定する。
(表現活動の場は国語科に限らず他教科の活動にも、活用の場を広げていく)
- ⑤ ICT機器を課題提示や児童の意見発表等の際に効果的に活用する。

(2) 言葉の力を育てる日常的な取組の推進

- ① 言葉への関心を高める言語環境の充実を図る。
- ② 全ての教科において書く活動を充実(ノート指導を含む)させ、自分の考えや思いを表現する力を育成するため、ICTを活用する。
- ③ 燕長善タイムを活用した基礎学力の定着を図る。
- ④ 児童の学習意欲を高める表現活動例を実践を通して蓄積していく。

4. 研究の内容・実際

(1) 研究の内容

- ① デジタル教科書の活用方法にかかわる職員の理解・技能の向上
 - ア 教科書会社から講師を招き、デジタル教科書の活用方法を全職員が学ぶ。
 - イ 先進校の実践から、デジタル教科書活用事例の収集し、研究を深める。
 - ウ 児童が自分の考えをまとめたり話したりする道具として活用できるようにICTの効果的活用法を学ぶ。
- ② ICTを活用した「言葉の力」育成の工夫
 - ア 朝学習(長善タイム)の効果的な指導にかかわる共通理解と継続的な実践
 - イ 言葉の力を伸ばすフラッシュ教材の発掘・開発及び情報収集を行う。

(2) 研究の実際

- ① 6年生の実践(国語「佐渡に行きたくなるようなパンフレットを作ろう」)

修学旅行へ行く前の調べ学習として、実際のパンフレットを参考にし、パンフレットの工夫を見つける活動を行った。グループごとに、「文字が多く情報が詳しい物」、「写真やイラストが入っていて見やすい物」という違った種類の2つのパンフレットを見比べて、自分たちがパンフレットを作成するための工夫を見つけるという活動である。

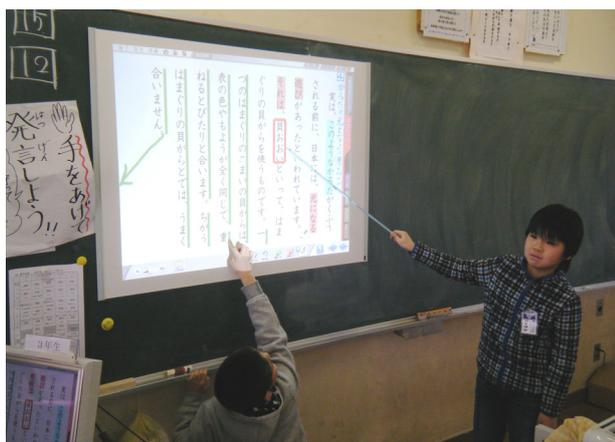
初めは、個人で工夫を見つけて付せんを貼り、次に見つけた工夫をグループで話し合った。グループごとの話し合いの中で、どちらのパンフレットからも工夫されているところ(写真、説明の仕方、文字の色や大きさ、吹き出し、割り付けなど)をたくさん見つけることができた。

グループでの話し合い後、全体に説明する場面では、パンフレットの工夫が具体的に分かるよう、書画カメラを使ってスクリーンに映し出した。視覚的に見やすくしたことで、他のグループから質問や意見が活発に出た。「ほとんど文字だけ」というパンフレットからは、「見にくい」というマイナス意見しか出ないと思ったが、「情報量が多く詳しく調べられてよい」というプラス意見も出るなど、話し合いの充実に寄与した。



書画カメラを使ってパンフレットを説明する児童と、それを聞き入るように見ている児童

② 3年生の実践 (国語「かるた」)



マーカーでキーワードを強調して説明する児童と、それをもとに確認している児童

説明的文章を段落ごとにわけ、段落の中心を正しく読み取らせる場面に「電子教科書」を活用した。1～3段落までは、「かるたの誕生」や「いろはかるた」「いぬぼうかるた」「百人一首」などについて説明されている。本時の4段落は、1～3段落にあるかるたの前に「その元となったかるたがあった」ということを読み取る学習である。

写真は、4段落「かるたの元となった貝おおい」を読み取る場面である。大切な接続詞や指示語などを、太い色マーカーでなぞり、視覚的に意識させることができた。そして、「貝おおいとはどんなものか」について書かれているところを見付け、サイドラインを引いていった。また、画面を保存しておくことで、次の時間の導入で話の流れを想起させることができ、スムーズに次の段落の展開に繋げることができた。

③ 4年生の実践 (国語「だれもが利用しやすい学校になるように」)

本時は、調べた資料を「日常的に必要なもの、行事の時に必要なもの、災害時に必要なもの」という観点で検討させる学習である。上記の観点では分けにくい設備もあると考え、「学校に設置する必要があるものか、その人たちにとってどうしても必要なものか、他の人にもあったらうれしいものか」という観点で整理した。

児童は、グループ内で意見を交換し、自分たちが調べた設備の中で、提案したいものの順位付けを行った。観点の意味をよく理解できないグループがあり、もう少し言葉の吟味が必要だったと考えるが、観点を示したことで、児童は順位付けの理由を考えることができた。他のグループから質問する時間をとれば、さらに考えを深めることができたと思われる。

グループごとにかいた発表原稿をもとに、全体の前で発表した。発表の内容と、話し方の二つの観点でお互いに検討し合い、最後に聞いていた児童からの意見を生かし、修正して練習する時間をとった。聞いている児童は、分かりにくい点を指摘したり、声の大きさについて意見を言ったりなど、市の担当者の方への発表の際に、自分たちの思いがしっかり伝わるように、修正が必要な点を指摘することができた。その要因の一つとして、ICTを使った見やすい資料提示により、全員に情報を共有させることができ、話し合いの土俵を同じにしたからだと考える。



発表原稿をもとに発表するグループと、提示された資料を見ながら発表を聞いている児童

5. 研究の成果

(1) 言葉の力を高めるための表現活動

単元を貫く目標（ゴール）を提示し、学習を行ったことで、教材に向かう児童の意欲が高まることを本年度の実践でも確信できた。ゴールを示すことで、「何を学ぶのか」「どう生かすのか」が分かり、教材から自分

の表現に生かすための何かを学び取ろうと集中して取り組むことができた。さらに、ICTやデジタル教科書の活用が児童の考えの可視化に結び付き、分かる授業の実現につながったと考える。

(2) 言葉の力の活用に適した多様な表現活動

今年度は、他教科の学習やその他の活動で得た知識や体験を国語で学んだ事項を使って表現する学習活動も積極的に取り入れた。それにより、国語で学んだ事を他の教科で得た知識や活動と関連させながらアウトプットすることができた。4年生は、「だれもが関わり合えるように」の国語の学習をもとに、総合学習の調べ学習と関連させながら、粟生津小学校の大規模改修に向けた校舎の施設について役所の方を招いてプレゼンテーションを行った。6年生は、「ようこそ、わたしたちの町へ」の学習をもとに佐渡への修学旅行の前にパンフレット作りについて学び、修学旅行の体験を生かして佐渡のパンフレットを完成させた。どの実践も、ICTや電子教科書などを使用し、「何を学び、どう生かすのか」を児童がはっきりと目的意識をもって取り組むことができた。実際に体験する、自分で調べて情報を収集するという豊かな体験活動と関連させることで、より深まりのある学習活動を展開することができた。

6. 今後の課題・展望

学んだ型を使い表現する際に、今までは、「自分の作品ができれば終わり」というような個々の作業で完結していたのが、ペア学習などの場を設定することにより「果たしてこれは本当に学んだ型を使っているのか」など友達と確認し合う、評価し合う姿が見られるようになった。その、確認し合う、評価し合う活動の際にその基準となる『学んだ型』の確認や、どういう観点で評価するのかなど教師から明確に示すことが必要であった。指導事項を明確にして、どのような手立てでその力を付けさせていくのかを教材の特性を生かした教材解釈とともに考えていく大切さを感じている。その際、新たに購入したデジタル教科書で教材研究をし、どの単元のどの場面でどのような力を付けさせるためにICTを活用するかを、全校体制で考えていく必要がある。

学んだ型を使って作品を完成させ、発表することは上手になってきている。しかし、自分の発表が終わると満足してしまい、他の発表に耳を傾け他の意見から吸収したり、自分の考えを振り返ったりする姿の弱さも浮き彫りになった。これまでの研究で自分の考えをもち、発表する、伝えることはできるようになった。今後は互いに意見や考えを伝え合い、他の意見を取り入れて考えを練り上げたり自己の学びを深めたりする子ども達に育ていけるように研究を進めていく。そのために、電子黒板の有効活用を職員研修や公開授業などで検証し、お互いの考えをかかわらせる力を高めていきたい。そして、ICTの活用を通して、授業改善の工夫を図っていく。

7. おわりに

今回の研究を通して、改めてICT機器やデジタルコンテンツの活用は、課題提示場面及び考えの交流場面などで効果的であることが分かった。来年度は、「課題や友達とかかわり合う児童の育成」を目指し、より有効な活用方法を求めていきたい、と考える。